

日本語とハンガリー語のオノマトペ比較に見える音感覚

— 日本語とハンガリー語の近縁関係を支持する立場から —

Sound sensation in Japanese-Hungarian onomatopoeia comparisons

— In support of close relatedness between the Japanese
and Hungarian languages —

後 藤 史 与

はじめに

ヨーロッパは民族と言語のモザイク模様を呈していると言われる。そのヨーロッパのほぼ中央に、周囲を7つの国に囲まれた小国のハンガリーがある。北海道よりやや大きい国土 (93,030 km²) に1,072万人が暮らしている (ハンガリー政府観光局；2006年4月国立中央統計局)。

ハンガリーは西暦896年、現在のカルパチア盆地に侵入した騎馬民族のマジャル人が作った国である。マジャル人の故郷はウラル山脈の西側にあるヴォルガ川とカマ川の流域だった。考古学の研究では西暦500年頃マジャル人がウラル山脈の西側に住んでいたことが証明されているが、それ以前にどこに住んでいたか不明である (深谷2002)。彼らがヨーロッパへ移動の際も、カルパチア盆地定住開始から現在まで、多くの他民族と混血が行われ、外見上アジア系の特徴は失われたが、今でも時に蒙古斑を持って生まれる新生児がいると聞く。また、現在も歌われているマジャル民謡は東洋起源の五音階 (ドレミソラ) を基礎としており (サーヴァイ1999)、欧米人には異文化のリズムとテンポも日本人には心地よい。

マジャル人の言語 (ハンガリー語) はフィ

ンランド語やエストニア語と共にウラル語族に属する。フィンランド人とエストニア人は互いの言語で意思疎通が可能であるが、ハンガリー人も日本人と同じで、言語の通じる異民族は他に存在しない (深谷2002)。なぜなら、フィンランド語・エストニア語とハンガリー語の分離時期が紀元前2,000年頃と推測され (サーヴァイ1999)、紀元前1,000–500年頃、マジャル人はチュルク語を話す集団に接した結果、文法的にアルタイ語族の言語に酷似する言語に変わってしまったからである (プライス編2003)。日本語も文法的にアルタイ語族に酷似しており (深谷2002)、日本人にとってはハンガリー語が、ハンガリー人にとっては日本語が印欧語族の言語より習得しやすい。実際にハンガリーの日本語学習者の多くは外国語学習の中で日本語が最も容易な言語だと言う。

ハンガリー語の単語には「塩」を“só” [ʃo:]、「水」を“víz” [vi:z]、「良い」を“jó” [jo:]、「降る」を“hull” [hu?l] 等のように多くの類似語彙があるのに驚く。これはハンガリー語と日本語の祖語が近縁にあったからではないかと考えたが、残念ながらハンガリー語と日本語が同系であると証明するに十分な基礎語の音韻対応がないので (小泉1998)、単なる偶然の一致であるらしい。しかし、“pottyán”

[poʔtʃan] : ポチャンと落ちる、“koccint”
[koʔtsint] : カチンと鳴らす等、これらの酷似する擬音語も単なる偶然の一致なのだろうか。疑問を解くためにハンガリー語オノマトペに関する文献を探したが、鳥の名や植物名に関する研究があるだけで、筆者の疑問に答えるものは探し出せなかった。他にどのようなオノマトペがあるのか調べたくてもハンガリー語オノマトペの辞書はない。

それに対し、オノマトペが語彙として確立している日本には擬音語・擬態語辞書があり、研究も多い。その研究の中でも特に日本語オノマトペの音韻形態の特徴や日本語オノマトペの音象徴を調べ、それとハンガリー語のオノマトペを比較することにより、ハンガリー語オノマトペに日本語と共通する特徴等が見出せるのではないかと考えた。前述したように、ハンガリー人が日本人と同じアジア系の民族であり、共通の音階を持ち、文法的には共にアルタイ語族の影響を受けている等の点から、本稿では両言語が近縁関係にあるとする立場で日本語とハンガリー語のオノマトペの音韻形態及び音象徴に見える類似性の検証を試みる。

検証に使用するオノマトペは「英語－ハンガリー語中辞典」「ハンガリー語－英語中辞典」で収集したものを使用する。

オノマトペが豊富な日本語では擬音語、擬声語、擬態語、擬容語、擬情語など細かく分類する研究者もいるが、本稿では人・動物・物などが実際に発する音を模倣したものを擬音語とし、動作や様態の感じを象徴的に表したものを擬態語と定義し、擬音語と擬態語の総称として「オノマトペ」を使用する。

第一章 これまでの研究

1-1 言語の同系と近縁関係の研究

言語の研究は18世紀後半に英国人のジョーンズがサンスクリット語の文法とギリ

シャ語・ラテン語の文法に類似点を発見し、その後、19世紀にドイツで歴史的比較言語研究として飛躍的に発展した(田中1993)。その歴史的比較言語の分類で、ハンガリー語はウラル語族の言語に分類されるが、同語族のフィンランド語やエストニア語とは紀元前2,000年頃に分離し、系統的に遠い言語である(プライス編2003)。ハンガリー語と最も近い関係にあるとされる言語はロシアで話されている少数民族のマンシ語(ヴォグル語)とハンティ語(オスチャーク語)であるが、ハンガリー語はこれらの言語とも紀元前500年頃に分離し(早稲田2002)、紀元前1,000年から500年頃にチュルク語を話す民族と接した結果、文法的にアルタイ語族に酷似する言語に変化した(プライス編2003)。

一方、日本語に関してはH. J. Klaproth (1823, 1831)が「ウラルアルタイ語族」と関係があると述べたのが最初である(服部1948)。現在、「ウラル語族」と「アルタイ語族」をひとまとめにする見方は保留されているが(小泉1998)、両語族には言語の構造面で類似する特徴がある。例えば、明治41年に藤岡勝二がウラルアルタイ語族の諸言語において共通してあり、印欧語とは異なる次の14箇条をあげ、そのうち第3条のみが日本語に欠けているとした(服部1948)。

- (1)語頭に子音が二つ来ない。
- (2)R音で始まる語が無い。
- (3)母音調和がある。
- (4)冠詞がない。
- (5)性がない。
- (6)動詞の変化が屈折法によらず膠着法により一律である。
- (7)動詞につく接尾辞・語尾がかなり多い。
- (8)代名詞の変化が印欧語と異なる。日本語の助詞即ち「テニヲハ」の接尾による。
- (9)前置詞の代わりに後置詞がある。
- (10)「持つ」(have)という語がなく「…に…がある」という表現法を用いる。

- (1)形容詞の比較を表すのに、英語のように接続詞 (than) を用いないで、奪格を示す助詞 (日本語では「より」) を用いる。
- (2)疑問詞は陳述の終わりに疑問を表す助詞 (日本語では「か」) をつける。
- (3)接続詞の使用が少ない。
- (4)語の順序。修飾語は被修飾語の前に立つ。目的語が動詞の前に立つ。

(3)の母音調和の現象は後に有坂秀世らの研究により奈良朝の日本語にもあったことが明らかにされ、また15世紀の朝鮮語にもあったことが前間恭作らの研究により明らかとなつて、日本語・朝鮮語がアルタイ語と同系である蓋然性は高くなった(服部1948)。しかし、言語の構造的類似は歴史的比較言語学の分類では言語の同系に対する決定的要因にはならず、あくまでも2つの言語の基礎語(約2,000語)の音韻対応の証明が求められる。

1926年、ラムステッドは「かつてフィン民族はインドとペルシャの初期のアリア人の近くに居住していた。大国と同じく小さな野蛮民族も、その言語の中に、どんな国と隣同士だったかを示している。…(中略)…日本語を完全に研究するには、…(中略)…初めに朝鮮語、そしてアルタイ語。これが研究の正しい方法である。私は、かつて日本に住み、今は北方で少数の残存民族となっているアイヌについて言及しなければならない。この事実は日本人が南方から渡ってきたことを示している」と述べ、ウラル・アルタイ文化が存在していたかなり古い時代に日本人はウラル・アルタイと同系の種族から分岐し、北上して日本に辿り着いたとしている。この論文の訳者である大野(1987)は方言圏論を例に取り、東北地方の親族名称とタミル語(トラヴィダ語族)が類似しているの、日本語とタミル語は同系とした。その後、大野は1994年に約500語の類似語彙をあげて日本語はタミル語起源であるとしたが、これはまだ認められていない学説である。

日本語とハンガリー語の近縁関係に関する研究ではプレーレ(Wilhelm Pröhle トルコ語の専門家)がハンガリーの雑誌に「ウラル・アルタイ語族と日本語の比較研究」という小論を書き(ラムステッド1926)、日本語がウラル・アルタイ語に近縁の関係であると述べたようだが、その小論が入手できず、詳細は不明である。日本では1952年に泉井久之助がウラル語の本体に相当するフィン・ウゴル語と日本語との関係を検討している(小泉1998)。また、1980年にハンガリー人のカザール(L. Kazár)は原日本人がウラル語族と別れ、北シベリア経由で日本へ移動してきたと説明して日本語とハンガリー語の類似語594例をあげている。しかし、彼が類似とする語彙には漢語が含まれていたり、「葉」と「木」の意味を入れ替えたり、「月」における対比(tsuki:hó<基本形*kuje)は形の上で無理があり(小泉1998)、日本語とハンガリー語の音韻対応は認められていない。

以上のように日本語はアルタイ諸語に酷似する構造を持ちながらもそのアルタイ諸語の三つのグループ(チュルク語、モンゴル語、ツングース語)間の親族関係が印欧語族におけるほどの確からしさを以って証明されたとは言いがたい(服部1948)。日本語と琉球語が同系であることは証明されているが、日本語祖語がどの言語と同系か、諸説はあるが、いずれもまだ証明が確立していない。すなわち、日本語は現存する周囲の諸方言とはいずれも非常に遠い関係にある(服部1972)。

1-2 ハンガリー語オノマトペと日本語オノマトペに関する研究

印欧言語学の伝統に依拠する欧米の言語学において、オノマトペは言語体系の周位的なものであり、また小児語・日常語・俗語に多いものであるという認識からオノマトペ研究は言語の重要な研究分野と捉えられていない(筧・田守編1993)。ヨーロッパに定住して千

年以上経過するマジャル人の言語、ハンガリー語においても欧米言語学の影響を受け、オノマトペ研究は十分に行われていない。

ハンガリー語の研究文献を掲載する「Magyar Nyelv」(「ハンガリー語」：筆者訳)に数少ないオノマトペ研究の二例を見ることができる。第一例は1942年、R. Rapaicsによる植物名のオノマトペ研究で、ポンとはたいて(pukkant [pu?kant]=英 pop)綿毛を飛ばす子供の遊びから生まれたのが“pitypang” [pitj pang] (タンポポ(異称ツヅミ草))であることやつるでパシッと打つ(csattan [tʃa?ʦɒn]=英 crack)音から生まれたのが“csattagó” [tʃa?taɡo:] (野いちごの一種)であると述べている。第二例は1973年、J. Vörösによるもので、鳥の鳴き声から派生して“kakukk” [kaku?k] (カッコウ=英 cuckoo)や“pacsirta” [patʃirta] (ひばり=英 lark)などの鳥の名がで、さらにそれらの鳥が「鳴く」動詞が作られたと書かれている。

一方、日本語オノマトペに関しては、まず日本語に約2,500のオノマトペがあり(村田1993)、日本語の一大特徴と言われ(乾1950)、擬音語・擬態語辞書も数多くあり、その研究も多い。本稿では次章で1. 日本語オノマトペの音韻形態、2. 重複型オノマトペの優越性の原則、3. オノマトペの音韻特徴と音象徴に関する研究を検討する。

第二章 オノマトペの音韻形態・優越性の原則・音韻特徴と音象徴

日本語オノマトペとハンガリー語オノマトペを比較するに当たり、日本語オノマトペに関しては先行研究で明らかになったことを初めにあげ、その研究結果を元にハンガリー語オノマトペを分析する。尚、この章で分析対象となるハンガリー語オノマトペは「Magyar-Angol Kéziszótár」(ハンガリー

語-英語中辞典：筆者訳)と「Angol-Magyar Kéziszótár」(英語-ハンガリー語中辞典：筆者訳)から抽出したものである。

第一節 オノマトペの音韻形態

本節ではハンガリー語オノマトペと比較するために音韻形態(子音と母音)に基づいて日本語オノマトペを分類した田守(1993)を1-1で取り上げ、1-2でハンガリー語オノマトペを音韻形態により分類し、日本語と比較することにより、ハンガリー語オノマトペの音韻形態の特徴を明らかにする。

1-1 日本語オノマトペの音韻形態

以下に田守(1993)の音韻形態による分類を見るが、角岡(1993)のものも加えて不足を補う。

まず、音韻形態の特徴であるが、日本語オノマトペには①一音節の語基：子音+母音(CV)を持つもの、及びその語基を基本にした変異形と、②二音節の語基：子音+母音+子音+母音(CVCV)を持つもの、及びその語基を基本にした変異形がある。

①一音節の語基を持つものとその変異形

- (1)基本形 CV：ふ(と)、つ(と)
- (2)a CV+Q(促音)：かつ、さつ、ふつ
b CV+N(撥音)：かん、ばん、どん
- (3)CVV：かー、きゃー、さー
- (4)a CVV+Q：かーつ、すーつ、ばーつ
b CVV+N：かーん、がーん、ぼーん
- (5)a CV+Q-CV：かっか、せっせ、とつと(角岡)
b CV+Q-CV+Q：きゃつきゃ、しゅっしゅつ
c CVV-CVV：かーかー、きゃーきゃー、ぎゃーぎゃー

一音節を語基とする日本語オノマトペにおいて、(1)型オノマトペは現代日本語で二例のみで、普通(2)型が一般的で数も多い。また、(2)b型はほとんどが擬音語である。

②二音節の語基を持つものとその変異形

(6)基本形 CVCV：がば、ぐい、そよ

(7) a CVCV+Q：がばっ、ころっ、ぐさっ

b CVCV+り：ばたり、ぼきり、ほとり

(8)CVCV+N：ばたん、ちょきん、どきん

(9) a CV+Q+CV：すっく、どっか

(CVQCV+り：ばったり、がっくり)

b CV+NVCV：ざんぶ、むんず

(CVNVCV+り：ほんやり、すんなり)

(10) a 語基反復型 CVCV-CVCV：からから、ぱりぱり

b CVCVN-CVCVN：ばたんばたん、ころんころん

c CVCV+り-CVCV+り：ばたりばたり、ころりころり

(11)語基反復の変種

子音同一型：からころ (kara-koro)、
かさこそ、がきごそ第二音節同型：どたばた (dota-bata)、
ぺちゃくちゃ、
むしゃくしゃ全て異型：すたこら (sutakora)、
ぶつくさ、ちょこまか子音同一型+N：からんころん、
がたんごとん子音同一型+り：のらりくらし、
がたりごとり

第二音節同型：+ろ：しどろもどろ

二音節の語基を持つ日本語オノマトベの中で(6)型オノマトベは文語的響きが強く、現代日本語では極少数で、一般的な音韻形態ではない。より一般的なものは(7)(8)型である。(9)型オノマトベもやや文語的な響きがあり、現代日本語では珍しい形態である。

日本語オノマトベで最も典型的な形態は(5)c型及び(10)型で、特に(10)型は山口(2002)のオノマトベ語形分類では「ABAB型」と言い、

日本語オノマトベの中で最も寿命が長く、また日本語オノマトベ総数の半数まで占める(山口2002)。第二節でこの(10)型と(11)型のオノマトベを検証するが、便宜上同音反復の(10)型と反復変種の(11)型を合わせて重複型と呼ぶ。

1-2 ハンガリー語オノマトベの音韻形態

ハンガリー語オノマトベは「ハンガリー語-英語中辞典」と「英語-ハンガリー語中辞典」から抽出した270語を対象に分析した。これらの語について、日本語オノマトベと同様の分類をし、ハンガリー語オノマトベの音韻形態を探る。

辞典より抽出できた270語のオノマトベを見ると、語形に特徴のあるものが目立つ。一つは語尾に“-og/-eg/-ög”が付くもの(64例24%)で、これをタイプ1とした。次に語尾が“-n”のもの(32例12%)があり、これをタイプ2とし、語尾に“-ol/-el/-öl/-ul”が付くもの(28例10%)をタイプ3、語尾が“-t”のもの(24例9%)をタイプ4とし、タイプ1から4に含まれないもの(75例28%)をタイプ5、重複型はタイプ6(36例13%)、動物の鳴き声(11例4%)はタイプ7として分類すると、表1のようにまとめられた。分類後に品詞を調べたところ、タイプ1、2、3、4は全て動詞で、タイプ5に含まれる動詞とタイプ6に含まれる動詞を合わせると、270語中70%以上の196語が動詞であった。このことから、ハンガリー語オノマトベの統語範疇として最も多いのは動詞としてはたらくオノマトベであることも分かった。

ハンガリー語オノマトベの音韻形態を観察する前に、ハンガリー語オノマトベを発音記号で表すと、日本語の撥音に類似する[n]、促音と類似の[ʔ]、母音の長音化に類似の長母音[母音+:]があるので、日本語と同じくQ(促音)、N(撥音)、VV(長音)を使用してハンガリー語オノマトベの音韻形態を表す。

表1 ハンガリー語オノマトペ語形タイプ別分類

タイプ	語形	例	数(%)
1	語尾-og, -eg, -ögのもの (全て動詞)	biceg [bitseg] よろよろ歩く	64 (24)
2	語尾-nのもの (全て動詞)	böffen [bøʔfɛn] ゲップする	32 (12)
3	語尾-ol, -el, -öl, -ulのもの (全て動詞)	csiripel [tʃiripɛl] (小鳥が) チーチーと鳴く	28 (10)
4	語尾-tのもの (全て動詞)	biccent [biʔtsɛnt] うなづく	24 (9)
5	タイプ1~4 以外のもの (動詞・名詞・副詞・形容詞・間投詞など)	béget [be:ɡɛt] (羊・山羊が) メーメーと繰り返し鳴く	75 (28)
6	重複型 (動詞・名詞・副詞・形容詞・間投詞など)	böff-böff [bøʔf-bøʔf] ゲップ(の音)	36 (13)
7	動物の鳴き声	be-e-e [bɛ-ɛ-ɛ] (羊・山羊の鳴き声) メーメー	11 (4)

タイプ1の語尾“-og/-eg/-ög”やタイプ3の語尾“-ol/-el/-öl/-ul”は語を動詞にする接尾語で、それを除く部分が音の模倣や様子を表現している。タイプ2と4のオノマトペの音韻形態を見ると、タイプ2の32語中、一例(fröccsen)を除き、全てがCVQCVNの形態で、自動詞である。タイプ4はタイプ2の語に動詞語尾-tを付け加えて他動詞となっている。従って、タイプ2の語はCNQCVNが音を模倣した部分と言える。

タイプ5はタイプ1~4の語に繰り返しを表す動詞接尾辞や名詞化する接尾辞、形容詞接尾辞等を付加した派生語であること、またタイプ7は動物の鳴き声を文字化したものであるため、音韻形態別の分類より除外した。

タイプ1~4とタイプ6のオノマトペを音韻形態別に分類すると表2のようになる。

タイプ1から4までのハンガリー語オノマトペの音韻形態を多い順に5位まで示すと次のようになる。()内の%はタイプ1から4までの動詞オノマトペ148語中の割合である。

- | | |
|------------|----------|
| (1) CVQCVN | 55 (38%) |
| (2) CVC | 46 (31%) |
| (3) CVQC | 11 (8%) |
| (4) CVCVC | 8 (5%) |
| (5) CVCC | 7 (5%) |

動詞で最も多いCVQCVN形(55例38%)について、二例をあげて示すと、以下のようになる。

(例1) koccint [koʔtsint] (ガラスを) カチンと鳴らす

名詞: kocc [koʔts] (ドアなどを叩く音) コンコン (CVQC形)

重複型: kocc-kocc [koʔts-koʔts] (ガラスを打ち合わせる音) カチン

名詞: koccintás [koʔtsinta:] 乾杯

(例2) puffan [puʔfan] (落下で) ポンと音が鳴る

動詞: puffad [puʔfad] (物が) 膨らむ
puffaszt [puʔfast] 膨らませる

名詞: puff [puʔf] (発砲音) ポン、パン (CVQC形)

puffafás [puʔfada:] 膨張

形容詞: puffadat [puʔfadat] 柔らかくて膨らんだ

puffos [puʔoʃ] (袖等) フワッと膨らんだ

重複型: piff-puff [piʔf-puʔf] (物や机などに叩き付ける音) パンパン

例1の名詞“kocc”や例2の名詞“puff”は共にCVQC形でこれらが語基となって動詞の“koccint”と“puffan”ができ、さらに重複型“kocc-kocc”や“piff-puff”に派生したり、派生動詞から名詞“koccintás”“puffadás”や形容詞“puffad”“puffos”を生産したと考えられる。

表2 音韻形態別ハンガリー語オノマトベ

タイプ	音韻形態	例	数(%)	総数
1	CVC	biceg [bitsɛg] よろよろ歩く	41 (64)	64
	CVQC	cuppog [tsu?og] チュッと吸って音を立てる	11 (17)	
	CVCVC	csicsereg [tʃitʃɛrɛg] (小鳥が)チチと鳴く	4	
	CVVC	gágog [ga:gog] (鶯鳥が)ガーガーと鳴く	3	
	CVCC	dörmög[dörmög] (熊が)鳴き声を出す	2	
	CVNC	kuncog [kuntsog] クスクス笑う	2	
	CVCCVC	sistereg [ʃitʃɛrɛg] シューッと音を立てる	1	
	2	CVQCVN	cuppan [tsu?an] チュッと音が立つ	
CCVQCVN		fröccsen [frø?tʃɛn] はねかかると	1	
3	CVCC	cirpel [tsirpɛl] (小鳥が)チーッチーッ鳴く	7 (25)	28
	CVC	dobol [dobo:l] ドンドンと太鼓をたたく	5 (18)	
	CVCVC	zakatol [zakato:l] ガタガタ音を立てる	4	
	CVCVCC	dörömböl [dörömbø:l] ドンドンとたたく	3	
	CVCVQC	hurukkol [huru?ko:l] (七面鳥が)鳴く	2	
	CCVCC	fröcsköl [frøtʃkø:l] ピシャッとはねかかると	2	
	CVVC	dúdol [du:do:l] ささやき声で歌う	1	
	CVCN	csilingel [tʃilingɛl] チリンチリン鳴る	1	
	CVVVC	miaukol [miauko:l] ニャーニャー鳴く	1	
	CVNC	pancsol [pantʃo:l] (水等を)はじく	1	
	CVCVVC	pöfökel [pøfe:kɛ:l] (煙を)プーッと吹き出す	1	
	4	CVQCVN+N	cuppant [tsu?pant] (吸って)チュッと音を立てる	

6	CVQCx2	töff-töff [tø?f-tø?f] (汽車) ポッポ	15 (42)	36
	CVCx2	bum-bum [bum-bum] ドスンドスン	8 (22)	
	CVQCVCx2	dirreg-durrog [di?rɛg-du?rog] プリアリ怒る	2	
	CVVQVCx2	dérrel-dúrral [de:rɛl-du:rɔ:l] ドタバタと騒々しく	2	
	CVCVCx2	gügyög-gagyog [gydʒog-gadʒog] モグモグつぶやく	2	
	CVCVx2	pisci-pacsi [pitʃi-patʃi] ピチパチゲーム	1	
	CVCCx2	ripsz-ropsz [ripsz-ropsz] アタフタと	1	
	CVCVCVCx2	tipegés-topogás [tipege:ʃ-topoga:ʃ] (爪先立って歩く足音) パタパタ	1	
	CVNCx2	cseng-bong [tʃɛng-bong] キンコンカンと鳴る	1	
	CVNCVVx2	csengő-bongó [tʃɛngø:-bongø:] 鳴り響く	1	
	CVVCx2	dúl-fúl [du:l-fu:l] ブンブン怒る	1	
	VCVCVCV	icipici [itsi-pitsi] ほんのわずかな	1	

次に二番目に多い CVC 形 (46 例 31%) について見てみる。

(例 3) *dobog* [dobog] (機械等が) ブルンブルン音を立てる

名詞: *dob* [dob] 太鼓 (CVC 形)

動詞: *dobol* [dobol] (足や本等で) ドンドンと音を出す、ドンドンと太鼓を叩く

dobban [do?ban] (心臓が) ドキンドキン動悸を打つ

dobbant [do?bant] (足等を) 踏みつける

これは名詞 *dob* の CVC 形が語基となり、

動詞“dobog”や“dobol” “dobban” “dobbant”に派生したものと考えられる。

タイプ6の重複型では

(1)CVQC×2	15 (42%)
(2)CVC×2	8 (22%)
(3)CVQCVC×2	2 (6%)
(4)CVVQCVC×2	2 (6%)
(5)CVCVC×2	2 (6%)

()内の%は重複型オノマトペ36語中の割合である。重複型オノマトペで最も多いのはCVQC×2形(15例42%)で、二番目に多いのがCVC×2形(8例22%)である。

以上の点から、ハンガリー語動詞オノマトペの7割以上がCVC形とCVQC形であり、これを語基として動詞接尾語“-og/-ol”を付いたり、“-n/-t”を付加して自動詞と他動詞の対応形を作ったり、さらに“-ás/-és”を付加して名詞、“-os/-es”を付加して形容詞を作っていることが分かった。また、重複型もこの語基を反復させ、全体の6割以上を生産していることから、CVCとCVQCがハンガリー語オノマトペの主たる音韻形態と言えよう。

1-3 日本語とハンガリー語のオノマトペ音韻形態の比較

1-1では日本語オノマトペの音韻形態はCVまたはCVCVを語基とするものであることが田守(1993)の分類により明らかになったことを述べた。1-2ではハンガリー語オノマトペの音韻形態はCVCとCVQCが最も多いことが分かった。この違いは日本語が拍または音節の終わりが母音で終わる開音節語であることから(木通2004)、オノマトペも一般語彙の規則に従った音韻形態であること、一方ハンガリー語は子音で終わる閉音節語の規則に従ってオノマトペの音韻形態も子音止まりであることからくると思われる。

以上の比較結果により日本語とハンガリー語のオノマトペは音韻形態において、母音止めと子音止めの大きな違いがあることが明ら

かになったと言えるが、これをもって日本語とハンガリー語に近縁関係がないとは断定できない。なぜなら、印欧語族の英語は典型的な閉音節語であるが、同語族のイタリア語やフランス語は開音節語で(木通2004)、元々閉音節の言語を話す民族が開音節語を話す民族と接触することにより開音節語に変化した可能性、またそれとは逆の影響を受けた可能性もあるからである。当然のことであるが、二つの言語を比較する場合は様々な面から観察する必要がある。次節では日本語とハンガリー語の重複型オノマトペを比較し、両言語のオノマトペにある異同の検証を進める。

第二節 重複型オノマトペの優越性の原則

日本語オノマトペの語彙としての特徴を見ると、オノマトペ語彙は単に音声や態度を模したただけのものではなく、通常の語句と同様に日本語の語構造の規則に従って作られている(村田1993)。本節では日本語と英語の重複型オノマトペを比較し、それぞれの言語の語構造規則に従ってオノマトペ語彙が形成されていることを検証した田村(1993)の研究結果を見てみる。

2-1 重複型オノマトペの優越性の原則

日本語オノマトペの重複型は、全体の半数以上を占め、また最も寿命が長い。一般に語形成論ではオノマトペは例外的に扱われるが、田村(1993)は日本語オノマトペを通常の語句にはたらく「優越性の原則」に照らし合わせ、オノマトペに言語学的原則がはたらいっていることを示した。「優越性の原則」には意味条件と音声条件の二つがある。以下に原文を要約して検討する(田村1993 pp 106-111、pp 111-118)。

①「優越性の原則—意味条件」：等位構造A(AND) BのAとBの間に[importance]、[space]、[time]の意味尺度に関して、不等号の関係が存在するならば、 $A > B$ である。

つまり、意味の差のある組み合わせでは、後半部Bより、前半部Aのほうが意味的に優位性の高いものが来る。日本語と英語の場合、語順の定まった等位構造表現（凍結句）の実例を収集すると、過半数が意味条件で処理される。例えば、

- (1)[importance]: 親子、古いも若きも、
mam and woman, food and drink
(2)[space]: うえした、浮き沈み、賃借、up
and down, front and back, in and out
(3)[time]: きのうきょう、朝晩、二三度、
yesterday and today, once or twice

日本語の重複型オノマトペにはこの「優越性の原則—意味条件」の [time] の優位性によって順序が決定されたものがある。以下がその例である。

がらがらどすん、がらがらびしん、がらがらびしゃん、がらがらぼん、ずってんどー、ちんちんごー、ばたんきゅう、ぴかどん、どんびしゃり、すってんころり、すってんころりん

これらは例えば、「びか」と光って「どん」と音が続くものである。日本語には以上の11例があるが、英語には一例もない。鶏の鳴き声 “cook-a-doodle-doo” は一見 [time] の順に合致しているように見えるが、各部分が単独で用いられる複数の語基や形態素で構成されているわけではないので、重複型オノマトペではない。

次に、②「優越性の原則—音声条件」は(i)-(h)のハイエラキーに従って、前半部より後半部のほうが音的に優越性の高い要素が来ることを規定している。

- (i)音声規則ハイエラキー: 音節規則>母音規則>子音規則>語末子音規則

音節規則では前半Aより後半Bのほうが音節数が多い。例えば「見たり聞いたり」「煮ても焼いても」“bits and pieces” “tears and laughter”、日本語重複型オノマトペの音節規則の適合例は「ちんちろりん」「きんこーん」

「びんぼーん」等である。

- (o)母音ハイエラキー: (日本語) o>a>e>u>i

VV (長音)>N (撥音)>Q (促音)

- (英語) æ>ɔ, ʌ>e>u>ɪ; i>ɪ

母音規則では前半Aより後半Bの母音のほうが(o)の母音ハイエラキー上、強い音ができる。なお、短母音よりは長母音、二重母音のほうが強い音とする。適合例は「することなすこと」「根も葉も」“trick or treat” “young and old”、日本語重複型オノマトペの適合例は以下のものである。

- [i-a] ぴーちくばーちく、じたばた、ちぐはぐ、ぎくしゃく

- [i-o] きんこん、ちやほや

- [i-u] ちらくら

- [u-o] うろちょろ、すたこら、つべこべ

- [e-a] てきぱき、てんやわんや

- [e-o] でこぼこ、へどもど、

えっちらおっちら

- [a-o] やきもき、あべこべ、かたこと、からころ

- (h)子音ハイエラキー: 破擦音>閉鎖音>摩擦音>鼻音>流音>半母音

子音規則では前半Aより後半Bのほうが(h)の子音ハイエラキー上、強い音ができる。適合例は「あまからい」「風雨」“long and strong” “wine and dine”、日本語重複型オノマトペの適合例は「むしゃくしゃ」「ぬらりくらり」「うんともすんとも」である。

音声規則のハイエラキーの語末子音規則については、日本語に音節末子音がないので、ここに英語の適合例は省略する。

以上のように日本語の重複型オノマトペは、通常の語句と同様に語構造の規則に従って作られていることが分かる。

2-2 ハンガリー語重複型オノマトペの優越性の原則

ここではハンガリー語重複型オノマトペに

も日本語に類似する優越性の原則が存在するかを見る。中辞典より抽出したハンガリー語の重複型オノマトペは36例ある。重複型オノマトペは前半部と後半部の意味または音の差で優越性の原則を見出す関係上、同音繰り返し型11例は除外し、母音交替型19例と子音交替型6例の計25例を対象にする。

まず、「優越性の原則—意味条件」:[importance] [space] [time]それぞれの条件で25例のオノマトペを見ると、母音交替型19例は全て後半Bが意味を持つ単語であるのに対し、前半Aは意味を持たない。従って、子音交替型のみが意味条件の対象となる。その中で形容詞 *icipici* (ほんの少し) は前半部と後半部を切り離して単独では意味を持たないので、以下の5例が対象となる。

(1) *cseng-bong* [tʃɛŋg-bɔŋ] v (鐘が) キンコンコンと鳴る (英: ding dong)

(2) *csengő-bongó* [tʃɛŋgø:-bɔŋø:] a 反響する、鳴り響く (英: resonant)

(3) *csillog-villog* [tʃiʔlog-viʔlog] v 光る、輝く、きらめく (英: sparkle and glitter)

(4) *dúl-fúl* [du:l-fu:l] v プンブン怒る (英: fume with rage)

(5) *recseg-ropog* [rɛtʃɛg-ropɔg] v (椅子等の) 軋み音をあげる (英: creak and groan)
初めに上記5例について詳しく見る。

(1) *cseng-bong* と (2) *csengő-bongó* であるが、*csengő-bongó* は(1)の動詞 *cseng-bong* に形容詞接尾辞“-ó”を付加した派生形容詞である。(1)も(2)も鐘の最初の打音“cseng”に続き第二打音“bong”が重なって共鳴している様子を模写したものと考えると、意味条件の [time] に適合する。

(3) *csillog-villog* は英語の “sparkle and glitter” と意味を同じくし、後半部 “vill” のほうが前半部 “csill” より光が強い。これも最初の光より時間経過と共に光がより増す様子を模写していると考えられ、意味条件の [time] に適合する。なお、“-og” は動詞接尾

辞である。

(4) “*dúl-fúl*”、これは前半部 “*dúl*” が「激怒する」、後半部 “*fúl*” が「怒りの状態」を意味し、感情の発露と状態の継続を表していると考えられ、[time] の条件に適合する。

(5) “*recseg-ropog*” の前半部 “*recseg*” も後半部の “*ropog*” も意味内容に大差がないので、意味条件に適合しない。

次に母音交替型19例と意味条件に適合しなかった子音交替型2例 (*icipici*, *recseg-ropog*) について、「優越性の原則—音声条件」で見る。(イ)音声規則ハイエラーキの第一条件は音節規則である。この規則では前半Aより後半Bのほうが音節数が多いことになるが、ハンガリー語重複型オノマトペは全て前半Aと後半Bの音節数が同じであるため、第二条件の母音規則で21のオノマトペを見ることにする。対象の重複型オノマトペは以下のものである。

母音交替型 (19例) { } 内は英語

bim-ban [bim-ban] n (鐘の音) ボンボン、ドンドン {ding-dong}

clöp-clop [tslɔp-tslɔp] n (蹄、靴等) パカパカ、コツコツ {cloppety-clop}

csip-csup [tʃip-tʃup] a つまらない、ちゃちな {petty}

dérrel-dúrral [de:ʔrɛl-du:ʔrɔl] adv ドタバタと騒々しく {slap-bang}

dirr-durr [diʔr-duʔr] v プリプリ怒る

dirreg-durrog [diʔrɛg-duʔrog] v (鉄砲等) バンバンと鳴る、プリプリ怒る

gügyög-gagyog [gydʒɔg-gadʒɔg] v (言葉が見つからない感じで) モグモグつぶやく

hipp-hopp [hiʔp-hoʔp] int さあ早く!

kip-kop [kip-kop] v トントンと、コツコツと叩く {rat-a-tat-tat}

mikk-makk [miʔk-maʔk] n (リスや兎が) 食べる時に出す音) カリカリ

nyim-nyam [nim-nam] n ムシャムシャ(食

べる)

nyissz-nyassz [niʔs-naʔs] adv (はさみ等で) チョキチョコキと

picsi-pacsi [pitʃi-patʃi] n (遊び名) ピチパチゲーム {hocus-pocus}

piff-puff [piʔf-puʔf] a (物や机等に叩きつける音) パシン、(人を打つ) ピシッ

pikk-pakk [piʔk-paʔk] adv サッサと、手際よく {in a hurry}

ripp-ropp [riʔp-roʔp] adv (ダンス等で) パンパンと調子を取りながら

ripsz-ropsz [rips-rops] adv 急いで、アタフタと {in a hurry}

sitty-sutty [ʃiʔtj-ʃuʔtj] adv サッサと、手際よく

tipegés-topogás [tipɛgɛːj-topogaːj] n (爪先立って歩く足音) パタパタ {pitter-pat, pit a pat}

子音交替型 (2例) { } 内は英単語

icipici [itsi-pitsi] a ほんのわずかな {teeny-weeny}

recseg-ropog [rɛtʃɛg-ropog] v (椅子等) ギーギー軋み音をあげる {creak and groan}

日本語の「優越性の原則—音声条件」の母音ハイエラキーは $o > a > e > u > i$ 及び VV (長音) > N (撥音) > Q (促音) である。

初めに母音ハイエラキー $o > a > e > u > i$ の条件で上記対象のオノマトベを見ると、次のような適合例の結果が出た。

母音規則 $o > a > e > u > i$ の適合例

[i-a] bim-ban など 6 例が適合

[i-o] ripp-ropp など 5 例が適合

[i-u] csip-csup など 5 例が適合

[u-o] 適合例なし

[e-a] 適合例なし

[e-o] recseg-ropog の 1 例

[a-o] 適合例なし

最後に適合外となった 4 例について検討する。適合外オノマトベは以下のものである。

(1) clöp-clop [tsløp-tslɔp] n (蹄、靴等) パカパカ、コツコツ

(2) dërrel-dúrral [deːʔrɛl-duːʔral] adv ドタバタと騒々しく

(3) güggyög-gagyog [gydjɔg-gɔdjɔg] v (言葉が見つからない感じで) モグモグつぶやく

(4) icipici [itsi-pitsi] a ほんの少し

日本語の語構造上、母音ハイエラキーでは常に $o > a > e > u > i$ の順で、母音規則では前半部の母音より後半部の母音に強い音がある。従って、最も強い [o] は前半部と後半部のいかなる組み合わせでも後半部の母音となりうることから、ハンガリー語母音においても $o > \emptyset$ の関係が成立し、(1)の "clöp-clop" (前半部 [ø]、後半部 [o]) は母音ハイエラキーに適合すると言える。

(3)の "güggyög-gagyog" は前半部の母音が [y]、後半部の母音が [a] である。

上図の母音図を参照すると、ハンガリー語の [y] は日本語の [i] と同じく前舌狭母音であることから、最も弱い母音の一つであると言え、 $a > y$ の関係が成り立つ。従って "güggyög-gagyog" も母音ハイエラキーの適合例である。

(4)の "icipici" は前半部が母音で始まり、後半部が子音で始まる。日本語の「優越性の原則—音声条件」では「あまからい: amakarai」の例に見られるように、常に母音 > 子音の規則があり、"icipici" はこの規則に適合する。

(2)の "dërrel-dúrral" は前半部の母音が [eː]、後半部の母音が [uː] で、唯一この一例が母音規則 ($o > a > e > u > i$) に適合しない。

以上、対象としたハンガリー語重複型オノマトベ 25 例中、「優越性の原則—意味条件」で 4 例、「優越性の原則—音声条件」で 20 例の合計 24 例 (96%) に適合例が見られた。

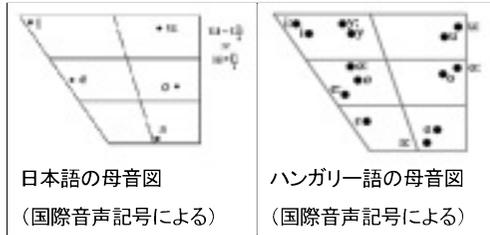


図1. 日本語とハンガリー語の母音図

(Web サイト「日本語の発音」と「ハンガリー語の発音」より)

2-3 日本語とハンガリー語の重複型オノマトペにおける「優越性の原則」の比較

日本語の重複型オノマトペには通常の語句と同様に日本語の語構造の規則に従って作られていることを2-1で見た。筆者が中辞典で抽出できた重複型オノマトペは36例であるが、「優越性の原則」に照らし合わせるためには重複型オノマトペの前半部と後半部に意味があるもの、音の差があるものだけが対象となる。従って、ハンガリー語の重複型オノマトペ36例から同音繰り返し型(bum-bum等)の11例を除き、25例(子音交替型と母音交替型)を対象に考察した。

「優越性の原則—意味条件」では日本語重複型オノマトペは[time]の優位性で順序が決定されることが田村の研究(1993)で証明され、ハンガリー語重複型オノマトペ子音交替型5例中4例にも[time]の優位性で順序が決定されていることが分かった。続いて「優越性の原則—音声条件」ではハンガリー語重複型オノマトペの母音交替型19例と意味条件で適合しなかった子音交替型2例を加えた21例を対象に考察した結果、1例を除く20例が音声条件の適合例であることが分かった。

以上のように、ハンガリー語の重複型オノマトペ25例中、日本語の語構造の規則「優越性の原則」に照らし合わせて適合するものが24例あったことから、ハンガリー語の重複型

オノマトペも通常の語句と同様に意味条件や音声条件の語構造に従って作られていることが明らかになり、その規則は日本語の語構造規則に酷似していることを示している。但し、ハンガリー語の対象オノマトペが36例と少なかったため、今後はより多くの例を検討していくことが求められよう。

第三節 オノマトペの音韻特徴と音象徴

3-1 日本語オノマトペの音韻特徴と音象徴

音韻特徴とその意味に関しては田守(1993)をあげ、その後に角岡(1993)、金田一(1979)を見てみたい。

重複型以外のオノマトペは、一音節ないし二音節の語基に促音(Q)、撥音(N)または「り」を付け加えたり、母音の長音化や音節を反復させており、これが日本語オノマトペの音韻特徴となっている。

それぞれの音韻特徴は独自の意味を持っている。まず促音であるが、語末に付加されるものと語中に挿入されるものがある。前者は「かっ」「さっ」「ばたっ」「ぼとっ」等で、語末促音が「瞬時性」「スピード感」の意味を表す。後者は「ぼったり」「がっくり」等である。多くの場合「ばたり」「がくり」等の促音を含まないものと対応しているので、語中挿入促音は「強調」の意味を表す。

撥音も促音と同様に語末付加と語中挿入の二つがあり、語末付加例は「かん」「ぼん」「ばたん」「ぼとん」等である。この種のオノマトペはほとんどが擬音語で、「共鳴」を表わす。一方、語中挿入は「ぼんやり」「すんなり」等があり、挿入促音と同様に「強調」を表わすと解釈できるが、これらのオノマトペには「*ぼやり」「*すんなり」のように撥音を含まない対応形は存在しない。

語末の「り」は促音や撥音ほど明確な意味を表わさないが、「ばたり」「ばたっ」、「ぼきり」「ぼきっ」のように比較すれば、促音の「ス

ピード感」に対して、「り」は「ゆったりした感じ」を与える。

母音の長音化は「カー」「きゃー」「カーン」「ぼーん」等、擬音語に多く見られ、自然界の物理的に長い音を表現するのに用いられている。また「僕はかーっと／かっとなった」のように擬態語にも見られ、「かーっ」と「かっ」の対応は、前者は後者の強調形である。

以上、日本語オノマトベの促音・撥音・「り」・母音の長音化は、声や音、事物の状態や動作等を模倣あるいは象徴的に表現するために欠くべからざるものであり、日本語オノマトベに特徴的に用いられている。

反復・「り」・撥音に関して、角岡（1993）の研究では、「ころころ」は比較的小きな物が連続して転がっているのであり、「ころり」は転んでから物体が止まっている状態を前提としている。「ころん」も物体が地面に落ちて少し転がってから静止していることを示していると述べている。

金田一（1979）は、反転を表わす「ころ」について言うならば、「ころっ」は転がりかけることを、「ころん」は弾んで転がることを、「ころり」は転がって止まることを表わすと述べている。また、「ころころ」は連続して転がることを、「ころんころん」は、弾みをもって勢よく転がることを、「ころりころり」は転がっては止まり、転がっては止まることを表わす。「ころりんこ」は、一度は転がりはしたが、最後に安定して止まって、二度と転がりそうもないことを表わすと述べている。

次に日本語オノマトベの語頭音について述べる。金田一（1979）は擬音語・擬態語の特色として次の三点を挙げている。第一は、言語には一般にソシユールが言ったように、その音と意味に必然的な関係はないが、擬音語・擬態語には必然的と言えないまでも、ある程度合理的な結びつきがあること。第二に、特に擬音語は外界の音に近い音を求めるところから、他の単語には用いられないような音、

例えばピュの音を用いる。第三に、第一の音と意味との関係が、比較的合理的に結ばれているところから、新しい音の組み合わせでも意味が理解されやすく、そのために、新作がどんどん許されるという性質をもつと述べている。第二の特色に関連して、日本語の擬音語・擬態語の語頭音と普通語の語頭音を調べたデータがある（城山 2006）。

一般に、日本語の普通語彙では語頭音に P 音が来るのは外来語だけであるが、擬音語・擬態語では P 音を語頭音にもつものが最も多い（城山研究室グラフページ）。さらに、一般の語彙では 5 位以下の語頭濁音も、オノマトベでは上位にある。

日本語の語頭音について、金田一（1979）は、p 音は俗語的で品が落ちる。g、b、z、d などの濁音は鈍い・重い・大きい・汚い、k、t 音は堅い、s 音は摩擦感の意味をもつと述べている。

3-2 ハンガリー語オノマトベの音韻特徴と音象徴

日本語オノマトベの音韻特徴は、語基に促音・撥音・「り」の付加や母音の長音化、語基の反復である。ハンガリー語オノマトベにも日本語に似た音韻特徴が存在するのだろうか。

表 3. 日本語のデータ（日本語の清濁と P 音）

擬音語・擬態語 (1835 語中)	分類語彙表 (27430 語中)
1. 274 語 /p/	1. 4181 語 /k/
2. 262 語 /g/	2. 3770 語 /s/
3. 237 語 /b/	3. 3034 語 /h/
4. 216 語 /k/	4. 1904 語 /t/
5. 134 語 /s/	5. 1225 語 /z/
6. 133 語 /z/	6. 1057 語 /g/
7. 128 語 /h/	7. 913 語 /b/
8. 99 語 /d/	8. 776 語 /d/
9. 34 語 /t/	9. 200 語 /p/

（城山研究室 2006 より）

まず、日本語の促音に似たものがハンガリー語の [ʔ] であることは既に述べたが、タイプ2 (語尾 [n] のオノマトペ) の動詞 (自動詞) 32 例及びタイプ4 (語尾 [t] のオノマトペ) の動詞 (他動詞) で、対応する自動詞を持たない4例 “biccent, füttyent, koccint, szippant” を加えた36例中、“suhan” を除く35の語中に [ʔ] が含まれる。これら35の語で基本形にも [ʔ] が含まれるものは以下の11例で、() に「基本形+接尾辞」の派生動詞や派生名詞を記す。

- (1)cuppan [tsuʔpan] (キス) チュッと音が立つ (cuppog)
- (2)csattan[tʃaʔtan] (鞭など)パン、ピシッと音がする、(指ではじいて)パチンと音が立つ (csattog)
- (3)csillan [tʃiʔlan] ピカッと光る (csillog)
- (4)durran[duʔran] (爆発物が)ドカンと破裂する、(鉄砲などを)ズドンと放つ (durrog)
- (5)kattan [kaʔtan] カチッと音がする (kattog)
- (6)koccan [koʔtsan] トントんたたく、(車同士が)ドスンとぶつかる (koccanás)
- (7)pattan [paʔtan] (鞭など)パン、ピシッと音が立つ、ポンと跳び上がる (pattog)
- (8)pukkan[puʔkan] ポンと鳴る、パーンと炸裂する (pukkad)
- (9)robban [roʔban] ドカンと爆破する (robbanás)
- (10)zökken [zøʔken] (人・物が)ドシンとぶつかる (zökkenés)
- (11)pattint[paʔtint] (指で)パチンとはじく、鳴らす (pattog)

これら11例中、(6)(8)(9)(10)以外は接尾辞 “-og” が付加された派生動詞をもつ。(1)を例にとると、“cuppog” は “cupp+og” である。擬音部分 (cupp) の語中に [ʔ] を持ち、接尾辞 (-og) を付けたこれらの動詞は、日本語の「擬音語基+動詞接尾辞」の「カッとする」

「ハッとする」などに似ている。なお、(8) pukkad は pukk+動詞 ad (与える) であり、(6)(9)(10)は “-ás” “-és” の接尾辞を付加した派生名詞で、基本形となる擬音部分に [ʔ] を持つ。

上記11例以外の動詞24語には、例えば、“cseppen” [tʃɛʔpen] は液体が落ちることを意味し、基本形+接尾辞の派生動詞：csepeg (滴る)、また koppan [koʔpan] はトントんたたくことを意味し、基本形+接尾辞の派生動詞：kopog (ドア等を叩く) で、このような例が18ある。

次に日本語の撥音に似た語末が [n] の動詞について考察する。促音に似た例で示したように、“-og” “-eg” 形の動詞の擬音部分の語末には [n] がない。しかし、擬音部分に “-an” “-en” を付加して、又は擬音部分の語末子音を重ねたものに “-an” “-en” を付加して自動詞となっているものがタイプ2である。そのうち、地面や物との接触や衝突、落下および爆発などの擬音語は32例中以下の20例である。() 内は擬音部分をもつ “-og” 動詞、派生名詞、間投詞などである。(5)csetten と (8) huppan に関して、擬音部分をもつ “-og” 動詞や派生名詞などは不明である。

- (1)cuppan [tsuʔpan] (キス) チュッと音が立つ (cuppog)
- (2)csappan [tʃaʔpan] (離れて) 落ちる (csapog)
- (3)csattan[tʃaʔtan] (鞭など)パン、ピシッと音がする (csattog)
- (4)cseppen [tʃɛʔpen] (液体が) ポチャンと落ちる (csepeg)
- (5)csetten[tʃɛʔten] (マウスのクリック音など) カチッと音がする (?)
- (6)csörren [tʃøʔrɛn] (ガラス、金属が) カチン、チリンと鳴る (csörög)
- (7)durran[duʔran] (爆発物が)ドカンと破裂する (durr)
- (8)huppan [huʔpan] (重いものが)ドスン、ドタンと落ちる (?)

- (9) *koccan* [koʔtsan] トントンたたく、(車
同士が) ドスンとぶつかる (*koccanás*)
(10) *koppan* [koʔpan] トントンたたく
(*kopog*)
(11) *locsan* [loʔtʃan] ポチャンと音を立てる
(*locsog*)
(12) *pattan* [paʔtan] (鞭など) パン、ピシッ
と音が立つ (*pattog*)
(13) *pottyán* [poʔtʃan] ポチャンと落ちる
(*potyog*)
(14) *puffan* [puʔfan] (落下) ポトンと音が立
つ、ゴツンと殴る (*pufog*)
(15) *pukkan* [puʔkan] ポンと鳴る (*pop*)、
パンと炸裂する (*pukkad*)
(16) *robban* [roʔban] 爆破する (*robbanás*)
(17) *roppan* [roʔpan] (物が) パンと音を立て
る (*ropog*)
(18) *toppan* [toʔpan] (不意に物が) ポトンと
落ちる (*topog*)
(19) *zökken* [zøʔkɛn] (人・物が) ドシンと
ぶつかる (*zökkenés*)
(20) *zörren* [zøʔrɛn] (短く) チリン／リンと
鳴る (*zörög*)

“*scattog*” [tʃaʔtog] と “*csattan*” [tʃaʔtan]、
“*potyog*” [potʃog] と “*pottyán*” [poʔtʃan]
などのペアとなっている動詞の意味はほとん
ど同じであることから、“-an/-en”を付加させ
ることで“-og/-eg”付きの動詞と異なる音の
余韻や微妙なニュアンスの違いを表している
と考えられる。

母音の長音化に似た音韻として、ハンガ
リー語に長母音が類似する音韻としてある。
語中に長母音を持つオノマトベは以下の17
例である。

1) 人や動物の声：

- bög* [bø:g] (赤ん坊が) 泣きわめく
dúdol [du:dol] ささやき声で歌う
hahotázik [hahota:zik] ガハハと馬鹿笑い
をする
sikít [ʃiki:t] (驚き・恐怖で) キャーッと悲

鳴をあげる

visít [vi:ʃi:t] (驚き・恐怖で) キャーッと悲
鳴をあげる

gágog [ga:gog] (鶯鳥が) ガーガーと鳴く

háog [ha:pog] (家鴨が) ガーガー鳴く

nyávog [na:vog] (猫が) ニャーニャ鳴く

béget [be:ʒet] (羊・山羊が) 鳴く

nyihaházik [ni:ɸha:zik] (馬が) ヒヒーン
といななく

zúg [zu:g] (蜂などが) ブーンとうなる

2) 気象関係の音：

fúj [fu:] ヒューと風が吹く

3) その他の音：

búg [bu:g] (オートバイ等のエンジン音)

ブルンブルンと音を立てる

dől [dø:l] (血、液体が) 流れる

elszivít [elsivi:t] (矢等が) シューッと飛ん
で音を出す

csúszik [tʃu:sik] ズルーッと滑る

(= *csúszkál* [tʃu:ska:l])

上記17例中“*dől*”を除く16例が自然界の
物理的に長い音を表している。この“*dől*”は
血や液体が流れる様子を表していて、日本語
では血の流れる様子を心臓の鼓動と共に「ド
クドクと流れる」と表現するところをハンガ
リー人は「ドゥールドゥール」とゆっくり多
量の血が流れる様子を描写しているように思
われる。液体の流れに関して、日本人は「川
がサラサラ流れる」、「水がチョロチョロ流
れる」と表現するが、ハンガリー人は、現在の
定住地に流れるドナウ川や定住前の故郷に流
れるヴォルガ川など、大河の流れの様子が反
映されているようだ。

日本語のオノマトベの音韻特徴に「り」が
あるが、これはハンガリー語にはないので除
外し、最後に反復について考察する。ハンガ
リー語には重複型オノマトベ36例と動物の
鳴き声6例の合計42例がある。これは日本語
重複型のみならず、他の言語の重複型オノマ
トベと同様に、音や動作の繰り返しや連続を

表している。

ハンガリー語オノマトペの語頭音に関しては、抽出した270例では [p] 音が一番多い。これらの語は日本語に訳した場合にも「ポチャン」や「ポトン」、「ポン」になり、落下や破裂する音の擬音語である。二番目に多い語頭音は [t] で、輝く様子は「びか」ではなく「チラッ」、電話は「りりん」ではなく「チュルチュル」、日本人が「つるつと」滑るところをハンガリー人は「チュース」と滑る。三番目に多い [d] 音は [z] 音と共に雷音・爆発音・衝突音などの大きく重い感じを表している。

3-3 日本語とハンガリー語のオノマトペ音韻特徴と音象徴の比較

まず日本語の促音とハンガリー語の [ʔ] 音の音韻特徴について、3-2で “-og” が付加された派生動詞(csattog、csillog、kattog など)の6例をあげたが、これらは日本語で言えば「カッとする」「ハッとする」などに似ている。しかし、これら日本語の一音節のものはほとんど擬態語で、擬音語は二音節+促音の「バタッと倒れる」「ポキッと折る」「ポトッと落ちる」などである。これら一音節のものも二音節のものも、語末の促音は「瞬時性」「スピード感」といった意味を表わしていることが窺えるので(田守1993)、ハンガリー語のオノマトペも同様ではないだろうか。

また、擬音の部分は単子音であるが、“-an/-en” が付く動詞では語末が二重子音になる派生動詞を持つものに関しては次のように考えられる。例えば、“csep” (しずく) が滴る様子は “csepeg” であるが、たくさんのしずくが滴る様子を基本形語末の子音を重ねて [ʔ] 音を作り、“cseppen” としたのではないか。他の例では “böfög” (ゲップする) -böffen, böff-böff (ゲップの音) がある。動詞 “böfög” から考えられる擬音部分は böf であるが、重複型オノマトペでは語末子音を重ねて [ʔ] 音

を作り出している。これはゲップの音を強調するためなのではないだろうか。あるいは “böff” という擬音が強く響くので、“-ög” 付加の動詞形を作る際に語末子音を落とし、他の動詞と同じ音韻形態にしたのかもしれない。これらの推測が正しければ、日本語の語中促音の音韻特徴と同様に「強調」を意味すると言える。

次に日本語撥音に類似する例として、ハンガリー語の語末が “-an” “-en” の自動詞32例中、接触・落下・爆発等の擬音語20例をあげた。日本語でも「かん」「ばん」「ばたん」「ぼとん」のように語末に撥音が付加されるオノマトペのほとんどが擬音語で、撥音は「共鳴」を表わす(田守1993)。「ぼた」と「ばたん」、「ばた」と「ばたん」のように対応形があるように、ハンガリー語でも “csattog” [tʃaʔtog] と “csattan” [tʃaʔtan]、“potyog” [potʃog] と “pottyán” [poʔtʃan] など、対応形を持つ。これらの動詞が同じ意味を持つことから、語末 [n] は日本語と同様に「共鳴」を表わしているように思う。

母音の長音化ではハンガリー語の長母音と比較する。日本語オノマトペの母音の長音化は自然界の物理的に長い音を表現するのに用いられているが(田守1993)、一般に長母音を含む擬音語は日本語やハンガリー語以外の言語でも共通の音韻特徴と思われる。長音を含む日本語の擬態語の場合、「かっ」に対して「かーっ」のような対応形を持つことで母音の長音化は「強調」をも表わすが(田守1993)、ハンガリー語オノマトペには短母音と長母音の対応形がないので、「強調」は表わしていない。

反復の音韻特徴は既に述べたように、日本語特有のものではない。日本語オノマトペの重複型はほとんどが同音繰り返し型(ABAB型)であるが、ハンガリー語の場合、母音交替型が最も多い。この型のオノマトペは後半部にのみ意味があり、前半部は全体のリズム

を取るためのものではないかと思える。

最後にオノマトベの語頭音に関して比較する。日本語オノマトベの語頭音ではP音が最も多いことはすでに述べたが、抽出オノマトベ270語の語頭音の集計作業を行ったところ、ハンガリー語においてもP音が最も多かった。表4にオノマトベ語頭音のデータを示す。日本語オノマトベの語頭音と数は城山(2006)のデータを引用し、その割合と調音法および音種を付記してハンガリー語オノマトベの語頭音との比較を示す。

落下する音や破裂する音を表す場合、日本語でもハンガリー語でもP音を使用するという共通点は興味深い結果である。打撃音や爆発音で濁音を使用する点は言語に関係なく共通する点であるように思われる。

小谷等(1993)による「言語による音声知覚の相違とオノマトベ」の研究では、日本語話者が母音に重点をおいて音の情報を取り入れていることが検証された。ハンガリー語では全ての語の第一母音にアクセントがある。この二つの事実から、両言語のオノマトベを比較する場合は単に語頭子音だけでなく、第一音節(子音+母音)の音を対象にすべきだと思われる。

表4 日本語とハンガリー語
オノマトベ語頭音の比較

日本語オノマトベの語頭音 (1835語中)				ハンガリー語オノマトベの語頭音 (270語中)			
語頭音	数	割合%	調音法音種	語頭音	数	割合%	調音法音種
/p/	274	15	破裂・無声	[p]	46	17	破裂・無声
/g/	262	14	破裂・有声	[tʃ]	45	17	破擦・無声
/b/	237	13	破裂・有声	[d]	34	13	破裂・有声
/k/	216	12	破裂・無声	[k]	23	9	破裂・無声
/s/	134	7	摩擦・無声	[b]	15	6	破裂・有声
/z/	133	7	破擦・無声	[z]	15	6	破擦・有声
/h/	128	7	摩擦・無声	[r]	13	5	流音・有声
/d/	99	5	破裂・有声	[h]	10	4	摩擦・無声
/t/	34	2	破擦・無声	[ts]	9	3	破擦・無声

おわりに

本稿では日本語とハンガリー語が近縁関係にあるという立場から、日本人とハンガリー人には類似の音感覚があると仮定し、日本語とハンガリー語オノマトベの音韻形態、重複型オノマトベの優越性の原則、音韻特徴及び音象徴に見える類似性の検証を試みた。

オノマトベの音韻形態に関して、ハンガリー語-英語、英語-ハンガリー語の中辞典で抽出したオノマトベ語彙270語を対象に検証した結果、日本語オノマトベがCV又はCVCVを語基としているのに対し、ハンガリー語オノマトベはCVCとCVQCを基本形としていることが明らかとなり、開音節語(母音止め)の日本語と閉音節語(子音止め)のハンガリー語のオノマトベに音韻形態上の違いがあることが分かった。

基本形を基に生産される変異形では、日本語オノマトベは基本語基に撥音・促音の付加、語基の反復やその変異形があり、ハンガリー語オノマトベにも類似して、基本形に[n]や[ʔ]を付加した派生形があることと基本形の反復形があることが分かった。日本語の場合、基本形と変異形の品詞に変化はないが、ハンガリー語の場合は[n]や[ʔ]の付加により品詞が変わる。また、日本語オノマトベには母音の長音化があるが、ハンガリー語オノマトベには短母音を長母音化した変異形は存在しない。

両言語に共通して存在する重複型オノマトベの比較では、日本語オノマトベの優越性の原則に照らし合わせて検証した結果、対象25例中24例(96%)が合致し、ハンガリー語重複型オノマトベも一般語句と同様に音声条件や意味条件の語構造の規則に従って作られていること、そして、その規則は日本語の語構造の規則に酷似するものであった。

音韻特徴の比較では、辞典抽出オノマトベの分析で、日本語の促音と同様にハンガリー

語の [ʔ] に「瞬時性」「スピード感」、撥音に類似する [n] にも同様に「共鳴」の意味が窺えるものと分かった。また、ハンガリー語の長母音は明らかに外界の音の長さを表現しているが、日本語のように母音の長音化による「強調」は表現していない。さらに重複型オノマトペは両言語とも人や事物の行動や運動の繰り返し又は連続を表現していることが分かった。

音象徴及び音感覚の比較では、日本語オノマトペの語頭音に [p] が多いのと同様にハンガリー語の辞典抽出オノマトペ語彙でも [p] 音が最多であった結果は興味深い。両言語の擬音語に関して、比較的軽量のものが落下する場合、両言語話者は [p] を使用し、重いものの落下には [d] を使用し、破裂には [p]、爆発には [b] を使用している。

本研究では日本語とハンガリー語のオノマトペ比較で音韻形態に違いが見られたものの、重複型オノマトペにある語構造の規則や音韻特徴に多くの類似点が検証できた。しかし、これらの結果をもって日本語とハンガリー語の近縁関係を決定する結論には成りえない。なぜなら、世界の言語を分類する歴史的比較言語学では、ある二つの言語が同属であると判断する決め手のひとつに「基礎語の音韻対応」がある。約 2,000 の基礎語には人体の名称や 1 から 10 までの数え方、親族名称、「大きい／小さい」「暑い／寒い」等の基本的な形容詞、「食べる／飲む」等の基本的な動詞等が含まれているが、オノマトペは一切含まれていないのである。

オノマトペが語彙として確立し、その研究も多い日本で、「オノマトピア」の編者である筧と田守は次のように述べている。「オノマトペの語彙としての確立度やその果たす機能によって、世界の言語を類型論的に分類することも可能であるが、まだ各言語における実態がはっきり調査されていないことから、これは困難な仕事になるに違いない」と (1993)。

確かに本研究でもオノマトペ辞書が無いハンガリー語と日本語オノマトペの比較調査はオノマトペ収集の初期段階から困難が多く、ようやく抽出できたハンガリー語オノマトペ語彙は 270 と少なかった。今後に残された課題としては、まず他言語と比較調査するに十分な数のオノマトペ語彙を収集することが望まれる。また、日本語の一大特徴とされるオノマトペであるが、韓国語には日本語以上にオノマトペが多く(城山 2006)、日本語との比較研究も進められている。今後、機会があれば韓国語とハンガリー語の比較や、アルタイ語族のトルコ語かモンゴル語のオノマトペを調査し、日本語オノマトペと比較研究したいと考えている。

最後に本研究に当たり、ハンガリー語オノマトペの抽出作業や日本語訳等に協力してくれた親友の Cser Katalin 博士、ハンガリー語オノマトペ論文を調べて下さった千賀徹教授、そして論文指導をお引き受け下さった高野照司教授に心から御礼申し上げたい。

引用文献

- 別宮貞徳 (1989) 「日本語のリズム 四拍子文化論」講談社現代新書
- 服部四郎 (1948) 「日本語と琉球語・朝鮮語・アルタイ語との親族関係」、『日本文化の起源 5』に再録 pp.497-530 平凡社 1973
- (1972) 【付説】「日本語の起源」東京新聞 昭和 47 年 5 月 16 日夕刊掲載『日本文化の起源 5』に再録 pp.530-535 平凡社 1973
- (1986) 「アルタイ諸言語の構造」三省堂
- (1999) 「日本語の系統」岩波文庫
- R. Horpácsi (1973) “Hangutánzó madárnevek” (擬音語鳥の名: 筆者訳) Magyar Nyelv 69
- 藤岡勝二 (1908) 「日本語の位置」『国学院雑誌』第十四卷第八、十、十一号
- 深谷志寿(2002) 「都市と文明 第 8 回: ブダペスト [ハンガリー] オーストリア=ハンガリー二重君主国の文化と都市」神奈川県川崎市高津市民会館 2002 年度第 2 期成人学校
- 池田次郎 (1982) 「日本人の起源」講談社現代新書

乾良一 (1950) 「擬声語雑記」 齊藤勇編『市河博士選
曆祝賀論文集』 pp.1-21 研究社

角岡賢一 (1993) 「日本語の「擬似オノマトベ」 — 日
本語と中国語の接点」『オノマトピア 擬音・擬
態の楽園』 pp.145-218 勁草書房

寛壽雄・田守育啓編 (1993) 「オノマトピア 擬音・
擬態語の楽園」 勁草書房

加藤晋平 (1988) 「日本人はどこから来たか」 岩波新
書

川田順造 (2004) 「コトバ・言葉・ことば」 青土社

L. Kazár (1980) "Japanese-Uralic language
compari-son: locating Japanese origins with
the help of Samoyed, Finish, Hungarian etc.:
an attempt" Lajos Kazár-Tsurusaki books,
Hamburg

木通隆行 (2004) 「日本語の音相」 小学館スクウェア

金田一春彦 (1979) 「擬音語・擬態語概説」『擬音語・
擬態語辞典』 pp.3-25 角川書店

—— (1988) 「日本語 (上) (下)」 岩波新書

金田一京助 (1938) 「国語史系統篇 (抄)」『日本文化
の起源 5』 に再録 pp.471-494 平凡社 1973

小泉保 (1998) 「縄文語の発見」 青土社

小谷学、恒本均、福田洋司、松本治彌 (1993) 「言語
による音声知覚の相違とオノマトベ」『オノマト
ピア 擬音・擬態の楽園』 pp.219-244 勁草書房

李基文 (1972) 「高句麗の言語とその特徴」『日本文
化の起源 5』 に再録 pp.594-624 平凡社 1973

村田忠男 (1993) 「日本語の AB 型オノマトベ・重複
形・等位構造表現の関係」『オノマトピア 擬
音・擬態の楽園』 pp.101-125 勁草書房

大野晋 (1987) 「日本語以前」 岩波新書

—— (1994) 「日本語の起源」 岩波新書

G. プライス編 (2003) 「ヨーロッパ言語辞典」 東洋書
林 2003

G. J. ラムステッド (1926) 「アルタイ諸語と日本語の
比較」 大野晋訳『日本文化の起源 5』 に再録 pp.
437-454 平凡社 1973

R. Rapaics (1942) "Hangutánzó növénynevek" (擬
音語植物名: 筆者訳) Magyar Nyelv 38

L. スコウラップ (1993) 「日本語の書き言葉・話し言
葉におけるオノマトベの分布について」『オノマ
トピア 擬音・擬態の楽園』 pp.77-100 勁草書房
1993

新村出 (1935) 「国語系統の問題」『日本文化の起源
5』 に再録 pp.325-333 平凡社 1973

鈴木尚 (1983) 「骨から見た日本人のルーツ」 岩波新
書

鈴木孝夫 (1996) 「日本語と外国語」 岩波新書

J. サーヴァイ (1999) 「ハンガリー」 南塚信吾/秋山
信吾訳 白水社

田守育啓 (1993) 「日本語オノマトベの音韻形態」『オ
ノマトピア 擬音・擬態の楽園』 pp.1-15 勁草書
房 1993

田中克彦 (1993) 「言語学とは何か」 岩波新書

丹野真智俊 (2005) 「オノマトベ (擬音語・擬態語)
を考える」 松籟社

早稲田みか (2002) 「ハンガリー語の不思議な世界」
『ハンガリーを知るための 47 章 — ドナウの宝
石』 羽場久み子 明石書店

山口仲美 (2002) 「犬は「びよ」と鳴いていた」 光文
社新書

引用辞典

- T. Magyar-L. Országh (1990) "Magyar-Angol
Kéziszótár" Akadémiai kiadó Budapest
- L. Országh (1993) "Angol-Magyar Kéziszótár"
Akadémiai kiadó Budapest

引用 web サイト

- (1)ハンガリー政府観光局：
<http://www.hungarytabi.jp/index2.htm>
- (2)日本語母音図、ハンガリー語母音図：
<http://ja.wikipedia.org/wiki/>
- (3)城山研究室 擬音語・擬態語：
[http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~jjksiro/
thema1.html](http://www.ipc.shizuoka.ac.jp/~jjksiro/thema1.html)